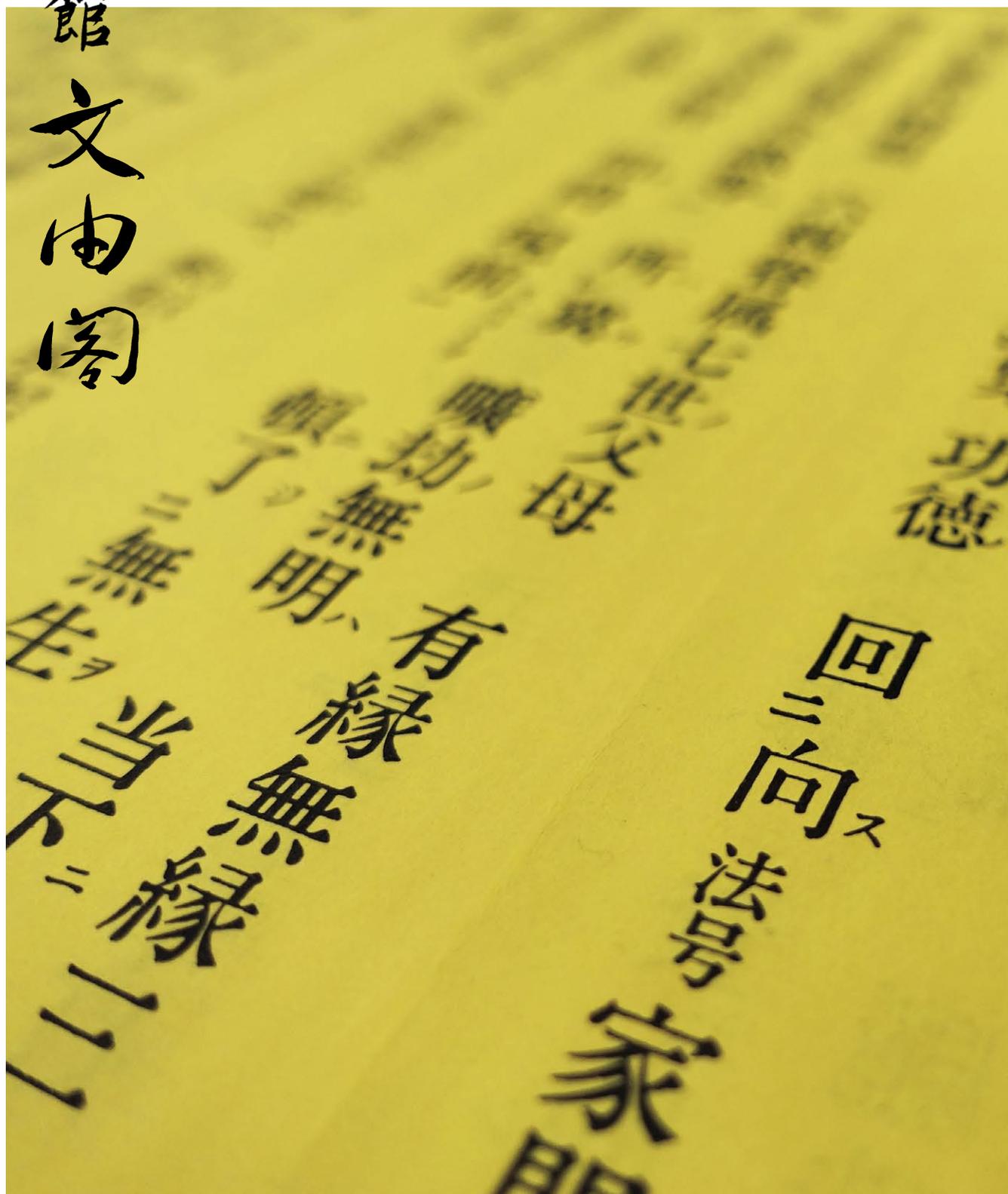


萬龜

文由閣竣工

特別号
No.3

檀信法會館
文由閣



時代の「意識」を問う

「手を打てば 鳥は飛び立つ 鯉は寄る 女中茶を持つ 猿沢の池」

奈良の興福寺にある猿沢池を詠んだ歌です。ひとつの音を聞いた時に、それが伝える意味は聞き手によっていくらでも解釈が異なる。「ひとつのことにも、さまざまな受け取り方がある」ということです。

仏教の起源はおよそ二千五百年ほど前。その仏教には現在さまざまな宗派が存在します。しかし、元を辿ればお釈迦さまが残した教えはたつたひとつです。それをどのように解釈したかによって、多くの宗派に分かれてきました。ですから、何れがより優れているとかが、絶対に正しいなどということはなく、それは受けとる個人の解釈に委ねられるわけです。

仏教には絶対神が存在しません。私たちはお釈迦さまの姿を信奉しているのではなく、お釈迦さまが残した教えを信奉しているのです。つまり、仏教徒である私たちは、二千年以上前に亡くなった故人の言葉に耳を傾けながら生きていくといえます。

世界は長い歴史の中で創造され、私たちはその上に立って今を生きています。今いるこの場所は、過去に亡くなった人々の意識によって築かれています。言い換えるならば、私たちは故人の意識のもとに存在し、亡き人たちの声を聞きながら生きていくのです。そして、今を生きる私た



ちもいずれば亡くなり、未来は亡くなった私たちの意識によって創造されてゆくのです。

これまでは寺院と信徒は直線的な関係にありました。しかし、これからの寺院は故人を社会と結びつけ、人々の意識を未来へとつないでゆくことを考えなければならぬのではないのでしょうか。東長寺は、人が生きた証が未来と関わりあい、循環する関係を築いてまいります。故人の意識が回ることで活性化される環境支援活動、新しい技術を創造する文化支援活動、自然災害に対する再生の智恵を育む復興支援活動。故人はこの世から姿を消したとしても、その存在は完全に消滅するわけではないのです。

曹洞宗で読まれるお経のひとつ「修証義」の冒頭に、「生死の中に仏あれば生死なし」という言葉があります。仏とは何か、それを仮に過去・現在・未来のつながり、故人の遺した記憶・意識と解釈してみれば、以下のようになります。人は生まれ、死ぬ中にも、その記憶・意識が後世に遺されれば生死にとらわれることはない。人は生まれ、いずれ死に至り、姿がこの世から消えたとしても、完全に消滅するわけではない。故人の意識や存在は骨や墓に遺されているのか。仏とはそのような物質的なものなのか。今一度、私たちの意識が問われる時代が来ているのではないのでしょうか。

東日本大震災という大きな出来事により、誰もが自己を超え、自己の存在に意識が向いたことは言うまでもありません。今一度仏教の本質に立ち返り、残された教えから新たな価値観を読み解きながら、亡くなった人たち、そしてこれから亡くなる私たちの意識を未来に回向する。

寺院と信徒は織り成すように、未来へと循環的につながってゆきます。

もくじ

- 04 住職挨拶 次代の寺院のあり方を想う
- 06 未来への回向
- 16 葬儀の個人化と終活 村上興匡
- 18 檀信徒参拝旅行ご報告
- 22 『回向—— つながる縁起』展を振り返って
- 24 文由閣プロジェクト活動報告
- 28 年末年始 山内行持およびイベントのご案内
- 30 教室のご案内

(平成二十七年十二月～平成二十八年三月)

『萬亀特別号』アンケート実施中

本号をもって『萬亀特別号』は終了とさせていただきます。来年より発刊します『萬亀』の充実した誌面づくりのために、同封しましたアンケートにご協力賜われますと幸いです。



住職挨拶 次代の寺院のあり方を想う

今号をもって萬亀特別号は終了し、来年より新刊萬亀を刊行することになります。萬亀特別号では、このたびの文由閣建立に向けての東長寺の新たな決意表明を行ってまいりましたが、住職就任から一年という短い期間で新堂建立といった大事業をおつとめさせていただきましたことは、何をもっても檀信徒皆さまのご理解、ご支援あつてのことと、心から御礼申し上げます。

昨年より、仏教文化講座では一年間にわたり、文由閣に携わる技術者の方と対談をさせていただきました。なかでも印象的だったのは、伝統工芸士の方々のお話でした。それぞれに伝統と向き合いながらも、現状から脱却し、そこに新たな価値を生み出そうと、さまざまな試みを続けておられました。伝統に胡坐をかいて単にこれまでと同じものをつくり続けていたのでは、文化は衰退するという彼らの言葉に、私も同じく伝統と向き合っていく立場にある者として強く共感し、勉強させていただきました。

現在、寺院は工芸の世界と同じく決して楽観的な状況にはありません。地方を中心として若年人口の減少に伴い、廃寺になる寺院が次々と現れ、都市部へも浸透していくことが予想されています。実際に東長寺でも長年墓守りをされていたお檀家さまの中には、後継者がおらず、墓を維持することができないという相談が増えており、すでに昨年は十件の方が墓じまいをされました。少子化や離婚率の上昇により、墓を継承することができないという時代の流れ

がさらに加速すれば、数十年後にはお檀家さまの墓石はほとんど無くなってしまうという事態になるかもしれません。しかしながら、たとえどのような状況になったとしても、寺院の使命とは、この寺を支えてくださった檀信徒皆さまの供養を永代におつとめし、長く寺院を存続していくことにあります。

東長寺はこのような問題に先立ち、個人を対象とした「縁えんの会」を二十年にわたり続けてまいりましたが、現状に甘んじていては衰退していくという言葉を胸に刻み、未踏の世界を恐れず、次代の仏教寺院のあり方を模索しつつ、歩み続けねばならないと考えています。

この度「結ゆいの会」という新しい供養の仕組みを始めた縁あつてか、先日、千葉大学大学院造園学科が実施する「多死問題」という講義にお招きいただきました。現在、東京都市部では年間十二万人を超える方が亡くなっており、今後、弔いの場をどのように用意していくかについて、さまざまなお話を伺いました。海外の研究者で構成された授業であったこともあり、固定概念というのは時に柔軟な思考を妨げるものでもあるとあらためて感じ、骨と墓石というものの意味を問われたような気がいたしました。

世界に目を向けてみると、火葬をしている国の方が少数です。考えてみれば、日本も近年まではほとんどが土葬であり、骨は土に還り、多くの人々はお墓をもつこともありませんでした。亡くなった方

を火葬し、遺骨にして、お墓を代々血縁家族で守っていくという考えが成立したのは明治以降のことで、仏教二千五百年の歴史の中ではごく限られた期間でしかありません。さらに昭和から平成にかけての成長の時代には、墓石をもつことがステイタスとなり、供養のあり方が見失われてきました。

しかし、仏教の本質に立ち返れば、墓石を維持することよりも、供養を続けていくことが本質であることは明らかです。仏教本来の供養主体の寺院のあり方を、皆さまとともに再度つくり上げていきたいと切に願っております。

本年も残りわずかとなりましたが、東長寺では年内にもさまざまな行事を執り行わせていただく予定でございます。年末のお餅つきや、大晦日の歳末法要、引き続き続く年始法要では皆さまとともに新年をお祝いしたいと存じます。

山内一同、皆さまのご参詣を心よりお待ち申し上げます。

合掌

東長寺住職

瀧澤遥風

未来への回向^{えこう}

東長寺の考える、これからの寺院

回向とは、「自ら積んだ功德を他者の利益のためにめぐらせる」という大乘仏教の特徴的な考え方です。僧侶は故人に向けて経を読んでいるわけではありません。今を生きる人たちに向けて経を説き、それをきっかけに仏教の教えに触れていただいで得た皆さまの功德を、故人に回し向けることで、供養を行っているのです。僧侶は法要の最後に、必ず回向文という経文を唱え、それによって参列者の功德を向こう側、つまり亡くなった方に届けています。供養とは参列者の能動的な行為によってなされるものであり、僧侶の役目とは、それを回し向けることにあるのです。東長寺は、これを亡くなった故人に回し向けるだけでなく、より大きな循環へと導く「未来への回向」という考え方を提唱します。寺院と信徒の直線的なつながりを超え、広く永遠につながる循環の中に導きたいと考えています。

直線的な世界観から、循環的な世界観へ

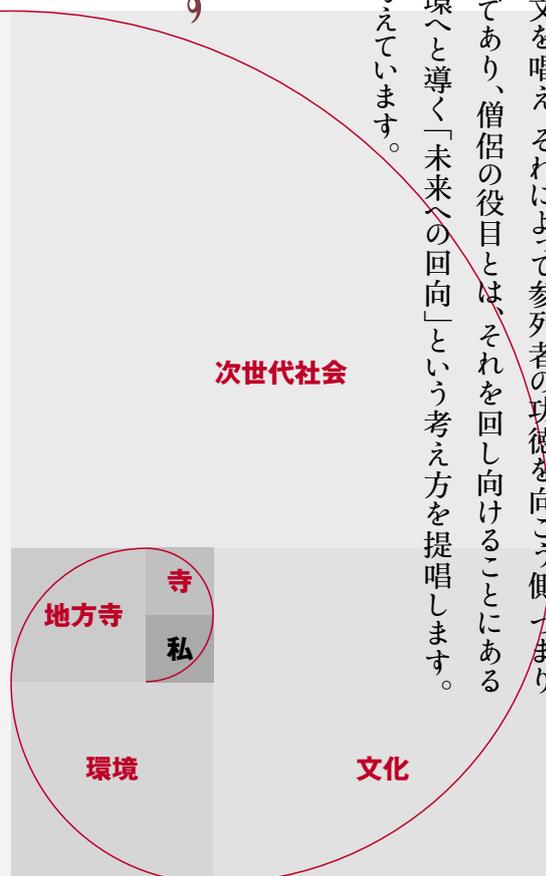
私が他とつながること、世界が持続してゆきます

これは現代社会における「回向」

東長寺の活動の根底にある考えです

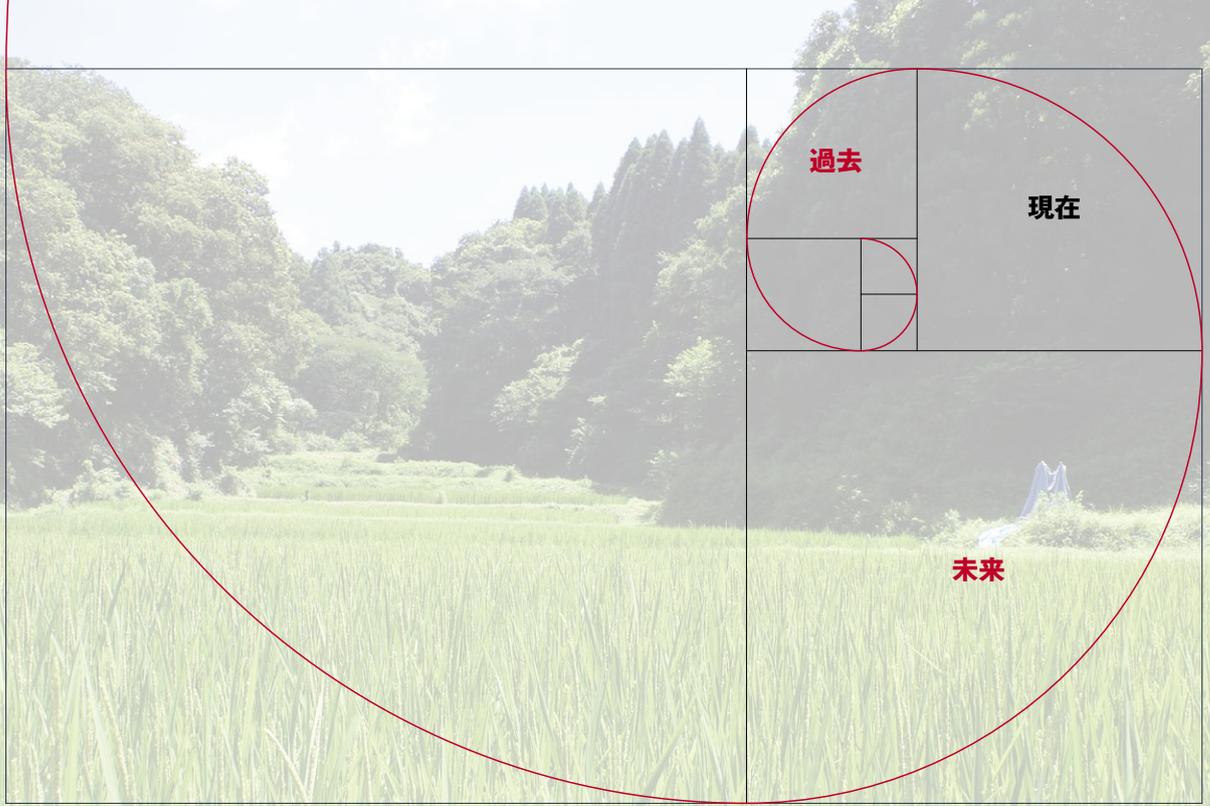
「諸法無我」——自我、自己の意識とは何か、それを究極まで追求してみると、結果、その実体はどこにも見つけられないのだと仏教は説いています。あらゆる存在はそれ自体で成り立っているのではなく、さまざまな他の要素に依存し、影響されてひとつの存在となる。何かひとつの要素が変われば、その存在の姿も変化する。これを仏教では「縁起」と言います。自己は他己と対峙するものではなく、自己は他己を内包し、ともに成り立っているのです。

直線的な世界観には始まりと終わりがありません。しかし今、東日本大震災の後、誰もが遠くの人や未来の世界に思いを馳せ、自らのこととして捉えたのではないのでしょうか。さらに、遠く離れた場所の出来事が、私たちの日常生活を左右することも知っています。私の存在は他のあらゆることに依存し、そして、私の存在は他のあらゆることに影響を及ぼしていく。これこそが、循環的な世界観です。自己と他己は深く関係しあい、循環には終わりが無く、この世界を持続させ、未来は膨張してゆくのです。



私は未来と
つながっている

未来世界



過去 + 現在 = 未来

先人の遺志の上に今を重ねて持続する未来をつくる

これは時間を超えた「回向」 東長寺が大切にしてきた世界観です

現在は、先人が築いた歴史の上にあります。人は亡くなっても存在が無になることはなく、この世の礎となっています。やがて私たちも世界の礎となり、未来を築きます。過去に現在が重なることとして、未来が生まれる。これは時代の間を功德が回ってゆく、時間を超えた回向の姿です。

人はその時代の課題を解決しようと過去を更新し、それを繰り返すことで未来が築かれます。伝統とは過去の単純な反復ではなく、その時代の革新的な挑戦が連なってきたものなのです。私たちの暮らしもまた、そのような先代から次世代へと続く連鎖の中にあり、未来をつくる現在には、必ず過去の土台が存在しています。自己と他己がひとつながりであるように、過去、現在、未来はひとつながりであり、未来をつくるのは、既にこの世界から姿を消した故人の意識でもあるのです。しかし、過去をそのまま繰り返しても、未来は生まれません。過去に私たち現代の意識が加わって、はじめて未来が現れるのです。

東長寺は「未来への回向」という考え方を提唱し、すべての人々の功德を、広く永遠につながる循環の中に導きたいと考えています。現在のこの世界が、過去の無数の故人の遺志によって導かれてきたように、社会や環境、文化は長い歴史の中で築き上げられ、そして今を生きる私たちが未来の歴史を築いてゆくのです。同じく過去の遺志もまた、未来へとつながってゆきます。美しく永遠につながる循環の螺旋。現在を生きる私たちは、過去に姿を消した人たちに語りかけながら未来を創造していきます。人は亡くなっても、その存在は消滅しない。その意識は、姿を変えてこの大地に根付いていきます。今まさに私たちはその上に立っており、私たちが大地に根付くころ、そこには未来の子どもたちが立っているのです。

フィボナッチ螺旋 F_{n-1} (過去) + F_n (現在) = F_{n+1} (未来)

数列のひとつで、今の数と1つ前の数を足すと、次の数になっている数の列。

暮らし、歴史、伝統といったものまでが、この現象と重なって見えてきます。

仏の教えとのつながりを深める

生前授戒

仏縁を結び、自らが「回向」を体現する

仏の教えとのつながりを深め

供養のありかたを見直します

東長寺は二十年にわたり、生前授戒の仕組みを社会に提案しつつ、現在では一万二千名を超える方に戒名をお授けし、お釈迦さまの弟子となって仏縁を結んでいただきました。永代供養付生前個人墓の先駆けとして、この仕組みは、その後、多く模倣されるようになりましたが、その本質は忘れ去られつつあります。

東長寺は、お墓を売っているではありません。

生前に授戒をし、仏弟子となって、仏の教えのもとに生きることが、仏教徒として本来あるべき姿です。東長寺では、生きていく今を仏弟子として過ごしていただきたいと、一日法要の中で授戒式を行っています。戒を受けた多くの方々が、互いに仏縁によって結ばれてきました。このように東長寺は、皆さまとお寺、仏の教えとのつながりを深め、そして同時に、供養のあり方を見直してきました。

供養の本質とは、亡き故人を悔やむことではなく、それを糧とすることなのです。

一日法要次第

一 坐禅

曹洞宗の教えでは、坐禅は悟りを開くためのものではなく、坐ること自体が悟りです。これを「只管打坐(しかんたざ)」といいます。

二 祝祷調経

釈尊、歴代祖師への供養のお経、また、仏法の興隆と世界平和、人々の幸せを祈るお経を唱えます。

三 作務

修行の一環として行う掃除等を作務といいます。

四 写経

東長寺では般若心経の原典、「大般若経六百巻」を写経します。

五 授戒式

釈尊より代々伝えられた戒律を授かり、仏弟子となります。このとき、戒名を授かります。

六 薬石

薬石とは仏弟子がいただく夕食のことです。

七 仏教文化講座

仏教とその歴史はもとより、民俗学、美術、文学、音楽など、仏教を通じて見た世界を幅広くとりあげ、講師を招いて講座を開きます。

八 供養

年間を通じて、その月に亡くなった方々の供養を行っています。水の苑に灯火をともし「萬燈供養」という形で行います。

授戒の後、戒名を記載した位牌が納骨堂に設置され、死後、納骨されて、永代に供養されます。

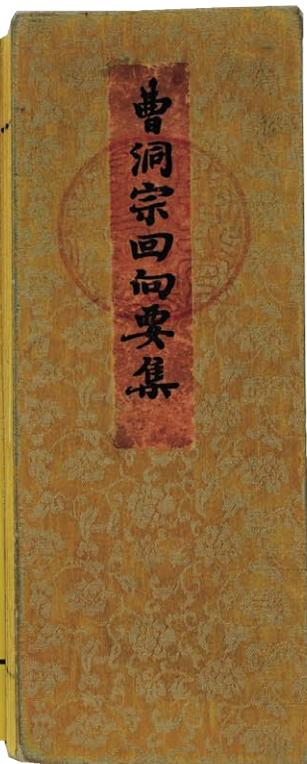
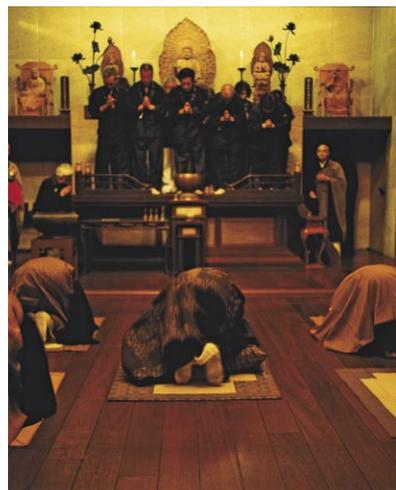
仏弟子のつとめを考える

先人の存在は、時に記憶として受け継がれてゆきます。そのひとつが「経」です。経とは仏弟子たちが長い年月をかけて、お釈迦さまの記憶を文字に記録し、伝えてきたものです。お釈迦さまの弟子である私たちのつとめとは、亡き人の記憶、遺志を記録し、未来につなげることだと言えるのではないのでしょうか。それが供養の本質だとすれば、私たちは今一度、供養のあり方を問うてゆきたいと考えています。

「参り墓」——故人とともに生きる

東長寺は、このたび文由閣を建立するとともに、文由閣龍樹堂の「参り墓」と、地方寺樹林葬の「祀り墓」に分骨する両墓制を提案しています。[*]

お参りという行為は、亡き故人と会話をし、今を生きる私たちが何をすべきなのかを考えることです。過去、現在、未来へとつながる私



檀越先亡累代諷經（總回向）

菩薩清涼月、遊於畢竟空、衆生心水淨、菩提影現中。

仰冀三宝、俯垂照鑑。

上來諷誦經呪、所集功德、回向法号家門。

先亡累代精靈、六親眷屬七世父母、有緣無緣三界万靈法界含識等、所冀曠劫無明、当下消滅、真空妙智、即得現前、頓了無生、速証仏果。

菩薩清涼の月は、畢竟空に遊ぶ、衆生心水淨ければ、菩提の影中に現す。

仰ぎ冀くは三宝、俯して照鑑を垂れたまへ。

上來、経呪を諷誦す、集むる所の功德は、密家門先亡累代精靈、六親眷屬七世の父母、有緣無緣三界万靈法界の含識等に回向す。冀う所は、曠劫の無明は、当下に消滅し、真空の妙智、即ち現前することを得。頼に無生を了じ、速やかに仏果を証せんことを。

たちの意識を故人とともに考えていくことも言えます。現在、お参りの習慣は、お盆やお彼岸、故人の命日などに限定されてきていますが、私たちが故人とのつながりを感じるのには、そのような決まった日だけででしょうか。亡くなったあの人のことを思い出した、生まれた子どもを見せたくなった、あの人と話がしたくなった——そういう日にいつでも気軽に参りできる、それが参り墓の役割です。

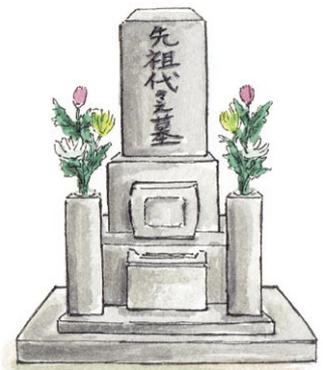
東長寺は、今を生きる私たちと歴史を司った故人との距離を近くに保ち、亡き故人とともに未来をつくり上げていきたいと考えています。

※両墓制は「結の会」会員さまが対象の仕組みですが、「縁の会」会員の希望者さまにもご対応しております。詳細は別紙をご覧ください。

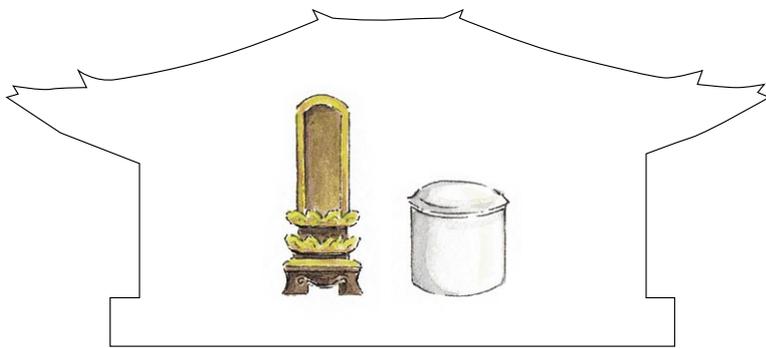
供養のあり方を見直す—— 在るから成るへ

故人の祀り方——それは二十世紀に生きる私たちの大きな課題です。故人を祀るために一族でお墓を守ってゆくという現代社会のこの制度は、必ずしも続けられなくなっています。少子化による後継者不足のためです。東長寺は、遺骨や墓を一族で維持するという物理的「在る」供養から、故人の想いを受け取り、未来へと伝える精神的「成る」供養への昇華を目指しています。

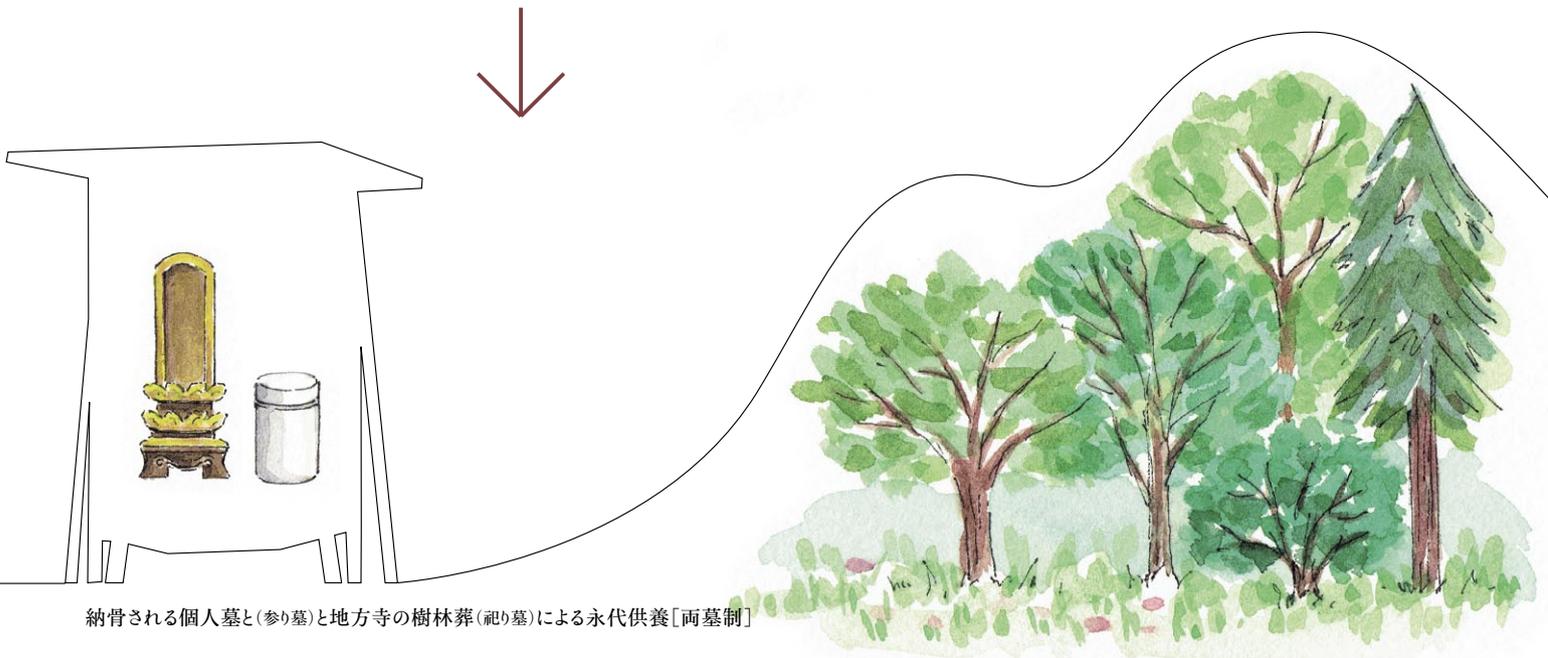
「縁の会」を立ち上げた際に「授戒」を、多宝塔を立ち上げた際に「合祀」を、そして「結の会」を立ち上げる際には「両墓制」と、それ



墓石を維持する家族による供養



納骨される個人墓の永代供養



納骨される個人墓と(参り墓)と地方寺の樹林葬(祀り墓)による永代供養[両墓制]

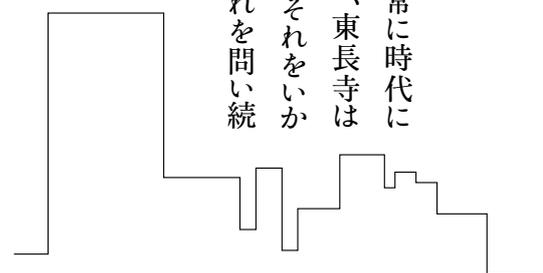
どれ仏教がもつ伝統様式に近代的な解釈を加えて提示してきました。授戒は葬式であるもの、合祀はするべきでない、祀り墓は捨て墓である——このような社会通念を改め、生前に授戒することによって仏子として仏の教えに生きる、血縁を超え仏縁でつながる人々が永劫に祀られる、自然環境あふれる地に還り、身近にいつでも遙拝すること

とができる、そのような姿を提案いたします。東長寺は、常に時代に呼応し、伝統に根付いた提案を続けてまいります。しかし、東長寺はその伝統文化をただ信奉するような姿勢をとりません。それをいかにして時代に照らし合わせるか、照射し循環させるか、それを問い続けてまいります。

家系制度の墓地継承問題を憂う

東長寺「縁の会」は、時代に先駆けて家系制度から脱却し、仏教本来のあり方を提案してまいりましたが、さらに難しい問題を抱える時代になってきています。現在、東京都心部の出生率は一・〇六人、これは言い換えると二つに二つの墓には後継者がいなくなることを意味します。無縁仏といわれるお参りされない墓が増えてきている一番の要因は、ここにあります。一方で、離婚率の上昇や家族形態の変化などによって、個人墓の需要は増えてきています。しかし、現在都心では年間十一万人が亡くなっており、今後三〇年間で亡くなる方すべてが、個人で墓石を設けたとすると、十二万(死者数)×三〇年×三.〇m²(一般的な墓地面積)＝九九〇万m²。この面積は、中央区とほぼ同等の面積に相当します。つまり、わずか三〇年間で中央区すべてが墓地になってしまうことを意味します。その墓が、いずれ誰もお参りすることのない無縁仏になってしまふのだとすれば、これからの時代に墓石を設けること、また、それを保つていくことには残念ながら限界があると言えるでしょう。

墓は元来、家族で守るものではなく、権力や富をもつ一部の層を中心にした個人のものでした。家族で墓を維持していく、いわゆる現在の檀家制度というものが誕生したのは明治以降のこと、さらに言えば、誰もがお墓を自由に建てられるようになったのは、日本が豊かになり、霊園といった形態の墓地が定着した昭和の高度経済成長の後だとも言われています。このような時代の流れの中で、墓をもつことが、あえて言えば墓石の大きさがステイタスになった時代がありました。そういった社会通念の中で、墓石をもてない、家族の墓を保ち継承できない私は信心がないのだろうか、そのような声を聞くことがあります。しかし、仏教において、墓を建てることを義務づけている教義はありません。仏教の本質は墓の維持ではなく、供養していくことにあります。次代の寺院は墓を中心とした考え方を示すのではなく、仏教の本質である供養主体の姿を考えていくべきなのです。



[イラスト]小野修子(p.10-15)

循環・持続世界を生み出すこと

樹林葬

檀信徒がつくる

新しい地縁が

寺院の継承につながり

環境の創造につながる

個人墓が市民権を得てきている中、亡くなった後、元の自然に還りたいという需要が存在し、それを実現してきたのが樹木葬です。樹木葬の起こりは、岩手県一関の環境NPO団体のメンバーである臨濟宗のご住職が、自然豊かに見える東北の山林が荒廃している現実を直視したことから始まりました。寺の背後にある山林環境を甦らせることが、樹木葬の理念だったのです。しかし現在、樹木葬を名乗るものの中には、大地に還り、自らの生きた証が環境に回向されていくと、言い難



いものもあります。東長寺はこのたび、真の樹木葬の理念を継承し、現状の環境保全に留まらず、失われた環境を再生し、新たな環境を創造すること、それを「樹林葬」と名付け、両墓制という新たな仕組みを提案いたします。

個人墓の増加も、やがては都市圏の墓地不足という課題に行き着きます。これを解決するのが両墓制です。つまり、都心の東長寺に納骨し、地方寺の樹林葬に分骨する方法です。日常生活の場に近い「参り墓」と、遠いけれど環境の良い「祀り墓」の両墓をもつのです。埋葬地を求めて徐々に墓が遠くなることはありません。いつまでも近くに参り墓のある暮らしをするための両墓制なのです。

「祀り墓」——自らの生きた証が未来をつくる

家族の問題の他に、低成長時代の現在、地方の再生が大きな課題のひとつですが、両墓制で地方寺に「祀り墓」をもつことが、この問題を解決する一助になってゆきます。少子化と檀家の減少で、全国の地方寺は継続が困難なところも増えています。地方に墓をもつことで、地方寺やその周辺地域と関わりをもつことになり、人々は縁でつながってゆきます。血縁、出生、生活地の縁、職場の縁などのこれまで培ってきた縁を超え、第三の地縁をつくることの意味を追求したいと考えています。そうすることで

死が個人の終焉ではなく、地方を支援することにつながる

のです。樹林葬は、その場所を含む周辺環境を活性化してゆきます。自然環境へ埋葬し、「祀り墓」とすることによって、地方の寺院と共働しながら未来を創造してゆきたいと考えています。東長寺が、両墓制・地方寺環境支援を展開していく意義は、ここにあるのです。



文化を回向する

えここう

月=文化を探して、雲間に釣り出す、その月明かりを皆で共有する。照らされた先には、次世代の文化が生まれます。そして次代に育まれる新たな文化は、また月となり、その先の文化を照らしていく。文化とはそうした循環の中に存在します。



人が意識を共有する

その時に文化が生まれる

同時代の人々の間で

そして時代を超えた人々の間で

文化とは、衣食住に関わるものから、言葉、学術、芸術などとても幅広いものが、総じて私たちの生き方を形づくる、行動様式や振る舞いを意味します。文化は一人では成り立つものではなく、皆で共有して初めて文化となります。そして文化は時代を超えて共有され、過去から現在へ、現在から未来へと継承されていきます。同時代の人々を超え、さらに違う時代の人々と共有することが文化を回向することと言えるでしょう。

東長寺は文化の由縁になるという指針のもと、このたび文由閣を建立いたしました。その名のとおり、寺院に集まる人々の意識が文化・環境の発展に寄与し、集約されるような活動をしていきたいと思っています。文化とは偶然に生まれるものではなく、人々の意識が集約された場所に生まれるものです。過去、精舎しょうじやという場所が仏弟子たちの意識を共有しあい、仏教文化が発展していったように、仏弟子である私たちの意識を集約する、そのような寺院の姿を皆さまとともに育んでいきたいと思っています。お釈迦さまの境地を表した言葉に、「釣月耕雲ちようげつこううん」というものがあります。これを次のように解釈してみます。月になぞらえた文化を釣り、時代を照らすこと、そして環境を豊かにする恵みの雨の源である雲を耕すこと。いずれも循環的に私たちの意識を未来へつなげ、私たちはこの大地に根付いていきます。お釈迦さまの弟子である私たちは、それを続ける媒体となる。これこそ、東長寺が表明する「寺のある暮らし」の新しいあり方なのだと考えています。



未来



現在



過去

文化にはそれを共有し、育むための土壌が必要です。それを豊かにするのは、この時代に生きる私たちのつとめ。雲を耕す、つまり土壌を潤すための働きかけをすることで、文化の種は芽を出し、成長し、花を咲かせて実をつける。その実は次の世代の土壌に種を落とし、また次の世代が潤した土壌で芽を出す。文化に必要な土壌は、それぞれの世代の人間が潤し豊かにしなければならぬもので、文化はその連続の間を永く継続してゆきます。

意識によって起こり 文化の育成を承り 循環の中へと転回し 未来の創造に結実する

私たちの意識は、自己から他己へ向かい始めています。東日本大震災によって、今一度考えることになったエネルギー問題とは、電力や火力、原子力などという議論を超え、社会を構成する私たちの行動様式、振る舞い、つまり文化をどのように創造してゆくのかということなのかもしれません。

文化の土壌は自然とできるものではありません。その文化を共有する空間や、それを実践する人、享受する人が交感する状況がなければなりません。そのような環境をつくってゆきたいというのが、東長寺の考える、文化を担い育む姿勢です。環境から文化までは私たちが媒介としたひとつなぎの循環の中にあります。人は環境が変わることで、意識が変わり、その意識が変わる最中に新しい文化というものが生まれてゆきます。

地方寺支援、伝統文化支援は、はじまりのひとつに過ぎません。自己の存在を他己の環境と社会のために活かすという「回向」の理念は、今後、寺院や伝統工芸に留まらず、さまざまな分野や活動への支援にも及んでいくことでしょう。その契機となるのが、故人ならびに私たちの意識、つまり仏弟子である檀信徒皆さまの存在だと考えています。私たちの意識によって起こり、社会の環境・文化の育成を承り、それが循環のサイクルに転回し、未来の創造に結実するもの、それが「結の会・両墓制」なのだと考えています。

葬儀の個人化と終活―村上興匡「大正大学教授」

檀家をもつ寺院のほとんどは、応任の乱（一四六七年）から江戸時代の初期までの約二百年に成立している。この時期は近世以降の「村」や個々に独立した「家」が確立する時期でもあった。生産の基盤である土地を累代に継承する「家」は祖先祭祀を発達させることになり、それが仏教の葬式や供養儀礼と結びつき、さらには切支丹を禁制を目的とした寺請制度が制度的な裏付けを与えて、今日の寺檀制の基礎がつけられた。村八分の残り二分が葬式と火事といわれるように、地域社会には「家」同士の「共葬」関係が成立していた。かつて寺院はそのタテヨコの交点に位置していたということが出来る。

明治三十一年に施行された民法では、戸主制度との関係で墓地は、「家」の祭祀財産として規定された。これは祖先祭祀を通じて国民精神の強化を図る政府の政策に基づくものであった。伝統的な仏教習俗の多くは根拠のない迷信として排除されたが、祖先祭祀はそれを免れた。柳田国男『明治大正世相編』には、明治になって自葬が禁止されるとともに葬埋地が限定されて、庶民階級も家の資力に応じて大きな石墓をつくるのが盛んとなったために、特に都市において共同墓地の不足や土地の権利の高騰が起こったと書かれている。

日本最初の公園墓地である多磨霊園の建設に関わり、その後の墓地行政の範となった井下清は、都市における墓地について、都市生活の勲功者の施設であり、鄭重かつ永遠の慰霊の場としなければならないが、幾十年には必然的に一定割合で家の断絶が起こるこ

とから、一定年限の後に合葬し、記録のみ長期間保存するような形態をとるべきであると述べている。すでに都市社会における「家」を中心とした墓制度、祖先祭祀のある程度の限界が指摘されていた。高度経済成長期を迎えた一九七〇年代には、全国的に、①中心儀礼の変化・葬列から告別式、②葬儀実働補助の変化・葬式組から葬儀社、③葬法の変化・土葬から火葬、の三つが並行して進んだ。これら変化は、職住分離や親子で職業が異なるなど、生活様式の都市化が大きく関係している。それに伴って葬儀の意味づけも、地域あげての公の行事から喪家の私の行事へと、また、地域主体の「送り出し」中心の儀礼から遺族が「弔問を受ける」中心の儀礼へと変化した。これを、第一段階目の葬儀の個人化と呼ぶことが出来る。

一九九〇年代から、特に大都市部を中心に、従来の葬儀や墓地のあり方について批判や変革の動きがみられた。そのひとつには継承者がいない人間の墓地取得の問題があり、血縁でない人々が同じ永代供養墓に入る活動の原型も、この頃つくられた。こうした葬儀や墓地のあり方の改革運動は、葬儀の関心が、他者（親など）をどう葬るべきかではなく、自分自身がどう葬られるかという視点に変ったことを背景としており、この変化を、第二段階目の葬儀の個人化と呼ぶことができる。

最初の個人化によって葬儀は、遺族を弔問し、悲嘆を癒やすための儀礼、すなわち二人称の死に関わる儀礼となったが、二番目の個人化で「自分はどうか葬られるのか」という一人称の儀礼に変わった。葬儀は「自己の最終表現」であり、「人生の卒業式」とも考えられ

るようになったのである。「終活」(人生の終わりのための活動)や「死に支度」という言葉が使われはじめるのも、この頃からである。

「終活」の考え方の背後には、親戚や地域、会社といったしがらみを断ってきた戦後の社会変化を肯定的に評価した上で、その結果として生じた「ひとりで死ぬこと」を引き受けていくべきとの姿勢がある。社会学者上野千鶴子氏は『おひとりさまの老後』の中で、準備された在宅ひとり死と無縁死を区別し、相応しい死に方をするために、間をおかず発見してもらえようこまめな人間関係をつくること、葬儀や墓の希望を伝え、必要な費用をあらかじめ用意することなどを、生前に行うべき準備として推奨している。

戦後、日本人は個の自立を尊重する社会をつくり上げてきた。「まわりに迷惑をかけない」という言葉はそれを象徴している。その一方で、遺された者たちの喪失の悲嘆を、周囲の者たちが癒やすこと

はより困難になってきている。「人は一人で生まれ、一人で死ぬ」といわれるが、実際はさまざまな縁の中で生きている。

かつて、先祖を供養するということは家や親族、地域に関わることであって公的な事柄であったと考えられる。都市化や高齢化が進んで、葬儀が個人化し、きわめて私的なことと捉えられるようになると遺族への社会的拘束は緩くなり、葬儀だけでなく墓地のあり方も多様化してくる。仏壇に位牌を祀るのではなく、写真を飾って語りかけたり、死者の骨の一部を墓ではなく手元に残す「手元供養」などの新しい形が現れる。地域の人々が同じ寺の墓に入るかつての社会に戻ることはかなわないとしても、バラバラになった個人を寺院を核としたコミュニティに再結集することは意味のあることだと考える。無縁社会と言われる時代、新しい同葬共同体の構築が求められているのではないだろうか。

むらかみ・じゅんきょう

1960年群馬県生まれ。大正大学文学部教授。天台宗僧侶。東京大学文学部卒。東京大学大学院人文社会研究科博士課程修了、文学博士。日本学術振興会特別研究員、文化庁宗務課専門職員、東京大学大学院人文社会系研究科助手をへて現職。専攻は宗教学・宗教社会学(宗敎社会学、宗敎民俗学)。近代化による死の意識の変化について研究。編著書に『慰霊の系譜——死者を記憶する共同体』、『社葬の経営人類学』など。

北陸文化探訪の旅——文由閣仏具を生み出した手技に出会う

このたびの檀信徒参拝旅行では、東長寺が新たに建立した文由閣の仏具が誕生した伝統工芸の現場を訪ねました。普段はなかなか入ることができない工房を訪ね、失われつつある伝統と、そこでの新たな試みを体感していただくのが今回の旅行の主旨です。この旅を通して、古いものを守るだけではなく、新しいものを生み出すうとするその姿勢に、あらためて強く共感いたしました。

東長寺は文由閣建立を契機に、今後とも未来の文化を創造するさまざまな現場を檀信徒の皆さまとともに支援していきたいと思っております。

1日目

[7:52]

東京から新高岡へ

[11:00]

工房見学「能作」

柔軟な発想力で「^{すす}錫」の魅力の世界に発信
錫は古くから仏具にも使われた金属。錆びに強く、手で曲げられるほど柔らかな素材です。その特長をテーブルウェアなどに活かしている工房を訪ねました。網状の鍋敷きかと思いきや、指で引っ張ると、なんとフルーツバスケットに。そんな驚きと発見の連続でした。

- 積極的に情報発信されていた。自分たちでマーケティングしつつ、日本国内だけでなく、諸外国にもオンタイムで情報を発信しているからこそ、若い職人さんも多いのでしょうか。
- あっという間に、二次元から三次元に変わる錫の柔らかさに、とにかく驚きました。製品もユニーク。

体験談

[12:00]

「金屋町」散策と昼食

ここが高岡鋳物の発祥の地。伝統の町家が軒を連ねた風情たっぷりの場所。今回特別に、かつて鋳物製造を行っていた町家「小泉邸」を訪問。歴史の町を内側からのぞかせていただきました。





[15:00]

工房見学「シマタニ昇龍工房」

おりんの音色を左右する調音の技

おりんの素材は、3枚の真鍮（銅と亜鉛の合金）の板。その板を真っ赤に焼いては叩き出し、溶接。さらに叩いてできあがります。溶接を取り入れたのは明治以降。より安定した音が生み出せるようになったといいます。島谷さんは、三代にわたって伝統工芸士に認定された調音の技の持ち主。音色の変わりように、一同驚くばかりでした。



- 実際に触って、おりんの薄さに、まずびっくり。そして、おりんの音色。調音前と後とで音がまったく違う！
- 伝統を守りながら、溶接という新たな技術を取り込むことで近代化してきたと知り、時代に応じた挑戦が必要だと感じました。 **体験談**



[16:00]

工房見学「モメントムファクトリー・Orii」

化学変化で編み出される色と模様

伝統的な高岡銅器の着色技術。その美しい色は塗料ではなく、素材の化学変化で生まれたものです。工程には、糠や大根おろしといった意外な材料が使われます。折井さんは、従来なかった新色や、困難とされた厚さ1mm以下の銅板着色に成功。またたく間に発色する様子は、まるで手品のようでした。



大理石のような美しい色。旧来のように問屋さんに頼るのではなく、オリジナルの製品開発の過程で生み出されたのです。

体験談

[18:30]

夕食（新湊「はかま鮨」にて旬の魚と寿司）
高岡泊（高岡マンテンホテル）

[10:15]

「山町筋」散策と昼食

商人が集った山町筋。土蔵造りの街並みは、火災から免れるために編み出されたもの。国の重要文化財である代表的商家・菅野家にも伺い、お昼には氷見にて氷見牛を堪能しました。



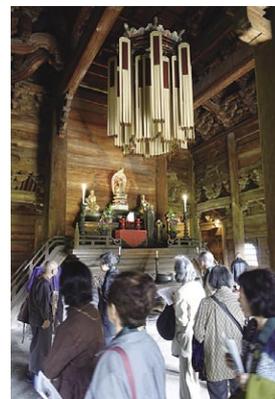
仏殿が、とにかく素晴らしい。深い陰影、空間の大きさと仏像の小ささの対比など、写真からは分からない体験。

体験談

[8:40]

国宝「瑞龍寺」参拝

美しい庭と回廊、圧倒的なスケールの仏殿。各所が国宝と国の重要文化財に指定されています。落語研究会出身の住職のお話に、引き込まれたひとときでした。



2日目



[15:30]

朝ドラ「まれ」のロケ地・輪島市大島町散策と白米千枚田を見学

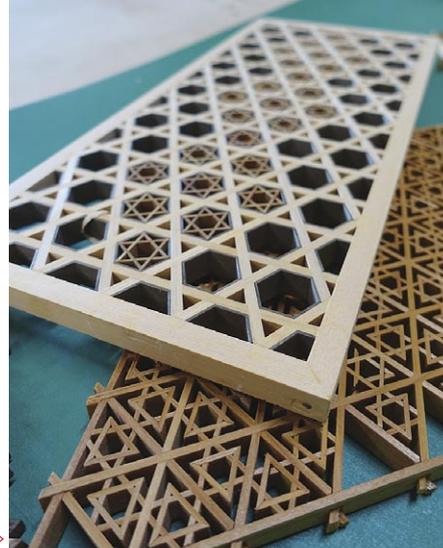


[18:30]

輪島泊(ねぶた温泉 海游 能登の庄)

- 生活洋式の変化で、こうした伝統的建具の需要が減少している現実がある。次世代につながる大切さと難しさについて考えさせられます。
- 大作になると、用いる木片は約7万個にもなると聞き、驚きです。

体験談



3日目

[8:00]

大本山總持寺祖院にて総諷経法要



[13:10]

工房見学「建具の遠藤」

極小の木片からつくり出される広大な世界

15mmほどの小さな星形。実は、釘や接着剤は一切使わず、薄い木片6枚を組みあげたもの。間近で見ても、接合部が分からないほどの繊細さです。建具職人たちが自らの技を競い合うことで、芸術品ともいえるほどに高度に進化してきた組子の技。美しい模様に、ただただ魅せられました。

「総持寺の二門、八宇に打開す」
能登地震乗り越え、開祖瑩山禅師の偉業継ぐ

縁の会会員・中田輝雄(フリーライター)

八年前の二〇〇七年三月二十五日、能登半島沖で発生したマグニチュード六・九の大地震を覚えているでしょうか。震源地に近い輪島地区はライフラインが寸断され、市民生活に大打撃を与えました。約七十年前に瑩山禅師が門前町に開創した大本山総持寺祖院も大きな被害を受け、現在も修復作業が続けられています。六年前に家族で能登を訪れた時、たまたま祖院に立ち寄る機会を得たのですが、道路には亀裂が走り、法堂の床に穴が開いているのを見て、被害の深刻さに心打たれました。

それから六年後、再び祖院を訪れる機会を得て感無量。東長寺はじめ全国や海外からの寄進を得て、ようやく法堂の修復が成ったのを機に東長寺の檀信徒二十名の総諷経法要が執り行われました。導師は鈴木永一監院老師自らが勤めになり、修行僧など僧侶総出で厳かに営まれました。檀信徒一人一人の名前が読み上げられた時には感動の涙を流す信徒もいたようです。

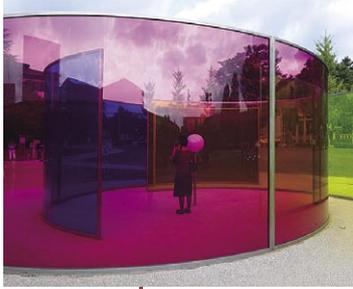
周知の通り、総持寺祖院は元亨元年(一三三二年)曹洞宗の第四祖瑩山禅師(常済大師)によつて開創されました。「道元禅師は宗門の父、瑩山禅師は宗門の母」と云われているように、瑩山禅師はお釈迦様の教えである「正法」を全国に広め、曹洞宗発展の基礎を築きました。明治三十一年の大火災後、鶴見に本山・総持寺が出来るまで、実に五百九十年もの間、曹洞宗の根本道場として発展してきたのです。

[16:00]
金沢駅から東京へ



[15:00]
ひがし茶屋街散策

かつて芸子さんが行き交っていた茶屋が軒を連ねる一角です。今はデザインショップなどに変わり、オシャレな街並みに。格子の伝統風景がほぼ完全に残っている、別世界でした。



現代美術って体験型が多いのね。これは写真じゃダメ。ここに来てみないと全然わからないと思うわ。

体験談

[11:00]
「金沢21世紀美術館」見学

現代美術中心の美術館。全周ガラス張りの建築がとてもユニークでした。

4日目

美術館にあるような漆器の数々。その技と質感を肌で感じることができました。

体験談



[13:20]
工房見学「輪島屋善仁」

塗りと研ぎが、漆の輝きをつくり出す堅牢な下地と繰り返される塗りと研ぎの工程。どの工程も、習得には数年はかかると言います。目の前で、熟練した手技を拝見。蒔絵や沈金をあしらった作品を手にとりながら、漆ならではのしっとりとした感触も味わわせていただきました。



[14:00]
「鈴木大拙館」見学

仏教を英語で広めた鈴木大拙の記念館。資料展示を見て歩くというより、精神性を体感する場所でした。

本当は集合時間を忘れてずーっと瞑想していたくなるような、神秘的な空間でした。

体験談

[12:20]
昼食(加賀市内にて加賀料理)



[17:00]
和倉温泉泊(加賀屋本陣)



[13:20]
「塗師の家」見学

日本一美しい町家と言われる「塗師の家」を特別に訪問。高度な塗師文化が凝縮した空間で、その文化発達の歴史について伺いました。



[11:40]
輪島の朝市散策と能登井の昼食(輪島「のと吉」にて)

能登産の食材と器を使うこと、使用した漆塗のお箸をもらえることが「能登井」の定義。こちらのお店は、地場の魚介を用いた能登井でした。



「曹洞宗 萬亀山 東長寺」「結の会」発足並びに「文由閣」建立記念

『回向——つながる縁起』展を振り返って一芹沢高志

「東長寺文化局」
P3 art and environment 統括ディレクター

「回向——つながる縁起」展が十月十二日をもって閉幕した。これは東長寺「結の会」発足と「文由閣」建立を記念して制作された展覧会である。東長寺活動の根幹に位置する「回向」という抽象概念と、東長寺が広範に展開する具体的な諸活動とを、いかに分かりやすく、統一的に紹介するかというその点に腐心した。

回向に限らないが、このような哲学的概念、とりわけ直観的把握を必要とする深遠な概念は、ただ言葉で解説しても一面的な理解しか得られない。そこで今回、この部分は多くを芸術の力に頼ることにした。インゴ・ギンターの「Seeing Beyond the Buddha」は光だけを通す特殊な糸、光ファイバーを五千本以上束ね、周囲の太陽光を集めて、その光がかりそめの佛陀の姿を形作るという作品だ。一切電氣を使わず、すべてが外界の光だから、光の佛陀は朝の光を受けてかすかに立ち上がり、日中の外光の変化を受けて揺らぎ続け、夜の帳とともに姿を消す。芸術作品であるから、その解釈は多様であり、自然界の光に作品素材を求めたギンターの先進性を賞賛する美術関係者や、この作品が示す「パッシブ」な姿勢に東長寺活動の本質を感じてくださる方、さらには深く手を合わせて拝まれる方と、観客の反応も実にさまざまであった。本展はそうしたすべてを飲み込む奥の深さを求めていたので、こうした多様な反応は実に嬉しく、また刺激的であった。

これとは対照的に、東長寺が「文由閣」を拠点に展開する寺院活動や、人と社会を結び、次代の文化・地域を創造しようとする諸活動については、パネルや模型、映像、さらには文由閣ツアーなども組み合わせ、全体像を解説するというかたちで臨んだ。映像や模型制作に、山城大督や大橋重臣、池将也、松野勉、水谷勉ら、新進気鋭の表現者たちに加わってもらったのも新鮮だったし、なによりも文由閣ツアーは好評だった。さらに回向展全体を重層的な体験として理解していたために、さまざまなトークや音楽イベント、ワークショップも展開した。そしてここを訪れた方々の想いをさらに大きな世界と結ぶために、つまり回向の営みをよりはつきりと示すために、展覧会場の外にはオノ・ヨーコの「念願の木」を置いた。

展覧会という意味では複雑な構成をとったと言えるかもしれない。なぜならそれはただの「展示」ではなく、トークイベントや音楽イベントを含む、これら経験の総体が回向展であったからだ。しかしそれは、回向展のつくり方そのものが、プロセス中心の仏教的世界観、直線的ではなく、エネルギーの連鎖的、螺旋的ダイナミズムに基づく世界の見方に、深く依拠していたからに他ならない。

その意味で、回向展のあり方そのものが、これからの東長寺の姿を予感させるものであったと言えるだろう。



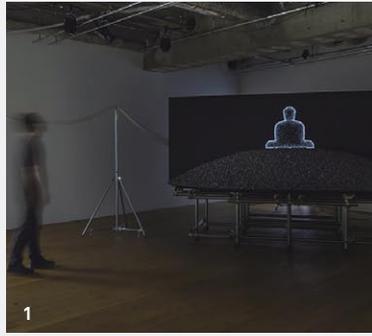
【第一巻 継ぐ】

会場：P3ギャラリー | 1

インゴ・ギュンター (アーティスト)

《Seeing Beyond the Buddha
(佛陀の向こうに観る)》

※展覧会後は、文由閣1階に恒久設置されます。



1

【第二巻 結う】

会場：P3ラウンジ | 2

山城大督 (美術家・映像ディレクター)

映像作品《回向 / ECHO》

大橋重臣 (別府竹細工伝統工芸士) +

池将也 (竹工芸家)

「文由閣模型」

松野 勉 (建築家) + **水谷 勉** (建築家)

「東長寺本院模型」



2

【第三巻 紡ぐ】

トークイベント『記憶の物語』会場：書院・羅漢堂

蔡國強 (アーティスト)「記憶の継承」[7月12日] | 3

20数年前のP3(現羅漢堂)と蔡氏の協同プロジェクトが、世界的に活躍する蔡氏の原点であり、かつ幼少期の瀧澤住職に影響を与え、現在の文由閣建立、文化支援活動の発想の源にもなったことが、三者によって語り合われた。

蜂谷宗彦 (志野流香道21世家元継承者)

「香りの道——一子相伝 500年の歩み」[8月29日] | 4
香木の植林活動など、受け継いだ文化を、未来へと回向するために、新たな挑戦の重要性を語った蜂谷氏。伝統とは革新の積み重ねの結果とする東長寺の「伝統」に対する考えと深く共鳴した回となった。

高梨直純 (「天プラ」代表/東京大学 特任准教授)

「人間はどこからきたのか」[9月18日] | 5
宇宙シミュレーター「Mitaka」で、仮想の宇宙旅行へ連れて行ってくれた高梨氏。138億年前のビッグバンから現在の私たちに至るまで、物質、非物質が関係し合い循環する、回向としての宇宙の姿を体感する時間となった。

石川直樹 (写真家)「知恵の記録」[10月2日] | 6

チベット・ヒマラヤ圏、ブータン、オーストラリアでの旅の経験を美しい写真とともに語ってくれた石川氏。世界を凍結したはずの1枚の写真も、見るたびに呼び覚まされる記憶が変わっていくという。記録と記憶の動的な関係が浮き彫りになった。



3



4



5



6

【第四巻 響く】

音楽シリーズ『響く心、響く声』会場：本堂

青柳拓次 (音楽家) [8月23日] | 7

世界中の部族、民衆のスカットをオリジナルのメロディにのせて歌う参加型コンサート。青柳氏と来場者が自然に声を重ね合わせながら、1日だけのハーモニーを響かせた。

evala (音楽家・サウンドアーティスト) [9月27日] | 8

寺の本堂という伝統空間に、最先端のテクノロジーによって立ち現れた音響空間は、寺の未来を強く感じさせる時間となった。

ウロツテナヤ子 (バリガムラン) + **津村禮次郎** (観世流能楽師) + **安福光雄** (大鼓) + **ニ・ワヤン・セカリアニ** (バリ舞踊、唄) [10月9日] | 9

バリ島と日本、異なる土地で数百年と継承されてきたそれぞれの芸能を一つに昇華し、さまざまな文化が混交した新たな芸能としての作品が生まれた。

【第五巻 繋ぐ】

ワークショップ『過去と未来を繋ぐ術』

会場：食堂・カフェきあん

大橋重臣 (別府竹細工 伝統工芸士)

「手仕事の記憶」[8月21日] | 10
割る、編む、人の手によって自在にかたちを変える「竹」の魅力を、実演も交えながら紹介した大橋氏。参加した子どもたちは、竹遊具「テナタ」、竹スプーンづくりを通して「手仕事の記憶」を体感した。

杉浦貴美子 (ライター/写真家)

「土地の記憶」[10月3日] | 11
杉浦氏、参加者が一緒になって、東長寺周辺の「土地の記憶」を拾い集めたワークショップ。3D地形図を手に巡った町歩き、1万分の1サイズで地形を表現した「等高線ケーキ」の実食など「土地の記憶」をさまざまに想像する時間となった。

【第六巻 続く】

会場：P3正面入口屋外 | 12

オノ・ヨーコ (美術家)《念願の木》

願い事を書いた札を結びつける参加型作品。観客が木に結わえつけた願い事は、会期終了後にアイスランドにあるオノ・ヨーコの恒久設置作品「イマジン・ピース・タワー」に送られた。世界中から集まった願い事は光の束となり、成層圏へと発信される。

文由閣プロジェクト活動報告

文由閣が建立して早半年を迎えようとしております。檀信徒の皆さまを中心に、多くの方々のご見学をいただき、誠にありがとうございます。まだご来山いただいていない皆さまも、ぜひ文由閣へお越しください。

九月二十三日の秋彼岸中日には、本院のお参りの後、文由閣一階をご休憩場所として皆さまにご利用いただきました。文由閣は檀信徒会館です。檀信徒皆さまの施設ですので、ぜひご法事やお参り後のご休憩場所としてご利用ください。また、ご葬儀や改葬、あるいは当山へのご希望などさまざまにご相談も承りますので、お気軽に職員にお声をかけていただけましたらと存じます。

結の会の募集も正式に八月に開始いたしました。檀信徒のご縁ある方の

東長寺樹林葬墓苑プロジェクト

東長寺の新しい永代供養墓「結の会」の特徴は、地方協力寺院の樹林葬墓苑に、遺骨の一部を埋葬することが可能だということです。自然に遺骨を選す樹林葬は、自然葬のひとつの形態ですが、ここ数年急速に普及してきました。都立小平霊園で樹林墓地と銘打って募集を開始したのが、その大きな理由ですが、それ以前より日本各地の少数の寺院が少しずつ、努力を重ねてきた結果というのが私たちの捉え方です。東長寺前住職の岡本和幸老師が住職を勤めている真光寺もそのひとつです。平成十八年より、少しずつ墓苑領域を広げて、現在では第三期の募集を行っています。

東長寺では結の会をはじめのうちに、この樹林葬に着目しました。しかし、都心で樹林葬墓苑を開苑することは難しい状況にあります。そこで、東長寺と縁ある地方の寺院と協力して樹林葬墓苑を整備し、東長寺の檀信徒の遺骨をその墓苑に埋葬できるようにすると同時に、地方寺院が独自の募集を行えることなどを柱とした、新しい共同事業プロジェクトを開始いたしました。

現在では、千葉県袖ヶ浦市の真光寺、および宮城県気仙沼市の清涼院の二カ所で具体的な整備を開始しております。今回は、この二つの墓苑の現在の進捗状況をお知らせいたします。

ご入会も多く、またご遺骨のお預かりもさせていただいております。まだまだ施設的には至らぬ点もありますが、これから徐々にハード的にもソフト的にも整えていく所存でございます。

文由閣の周りの木々は多くは冬枯れします。それは来春に向けて、じつと寒さに耐えると同時に生命の蓄えの時間でもあります。きれいな青葉を芽吹かせるためには、この時間が必要なのです。文由閣プロジェクトも時間をかけて大きく成長させていきたいと考えております。檀信徒の皆さまには忌憚のないご意見含め、成長の後押しをいただけたらと存じます。

東長寺檀信徒会館「文由閣」館長 手島涼仁

真光寺樹林葬墓苑 — 千葉県袖ヶ浦市

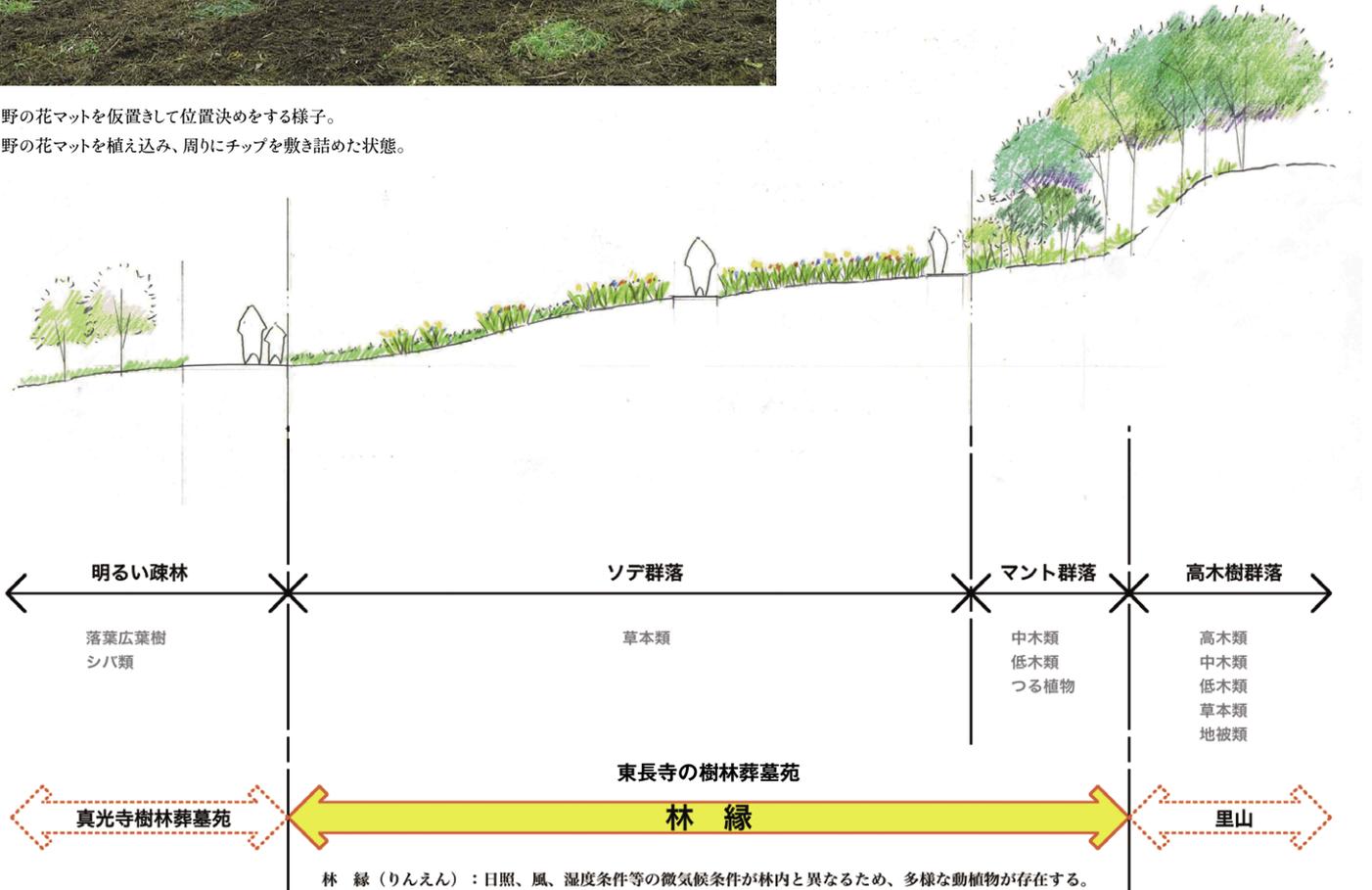
真光寺の墓苑は全体が約1ヘクタールあります。その一角に東長寺の墓苑を開苑することになりました。現在(十一月末時点)、工事はほぼ完了し、十二月より実際に遺骨の埋葬を開始する予定となっております。

墓苑整備のコンセプトは、「林縁の野の花の咲き誇る墓苑へ」というものです。敷地は下総台地の豊かな里山の縁に位置しています。「林縁」とも呼ばれる多様な動植物が存在する場所です。この場所に本来の豊かな里山の自然を再生させることができるのではないかと考え、従来型の樹木を植える樹林葬ではなく、「草原」の状態を維持していくこと、墓石の代わりに「野の花」を植える「草葬」という新しいスタイルを目指すことになりました。



上:野の花マットを仮置きして位置決めをする様子。

下:野の花マットを植え込み、周りにチップを敷き詰めた状態。



林縁の構造

清涼院樹林葬墓苑—宮城県気仙沼市

三陸の海を望む場所にある清涼院は、境内地が広く、伽藍も非常に大きなものです。その境内地の一番高い場所には、檀家さんの墓地があります。現在その墓地裏側では、東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトに位置づけられた、「三陸沿岸道路（通称、三陸道）」建設計画のための用地買収などがはじまっています。現在のところ開通の時期は未定ですが、開通した折には清涼院の直近にインターチェンジができることから、仙台からのアクセスがだいぶ良くなるようです。清涼院での墓苑整備コンセプトは、「現有杉林を利用した林間墓苑」というものです。伽藍の南側には急傾斜の参道があり、その東側には竹林が、西側には杉林があります。この西側の杉林を墓苑敷地として整備することにいたしました。

現在、杉自体は立派に成長しておりますが、林床が荒れている状態です。よってまずは林床をきれいに整地し、墓苑に必要な林間通路部分の杉を伐採していきます。また、小さな谷筋がありますので、そこにはデッキで橋をかけます。沢筋に雨水を流すことができれば、雨が降ったあとは小さな沢が林間を流れることとなります。墓苑は個別埋葬型と合葬型を併用します。

間伐した場所からは、見上げると杉木立に切り取られた青い空が見えるはずです。また、海への眺望を図るため列状間伐を行い、間伐をした杉を利用した見晴らし台なども数年後に整備する予定です。清涼院での樹林葬は、これまでの樹林葬の考え方とは異なり、「植える」のではなく「切る」ことを主題としています。今後、間伐が必要な多くの場所で、このような考えの樹林葬墓苑が増えることを願っております。



清涼院樹林葬計画図

気仙沼震災復興報告会

九月二十三日の秋期彼岸の中日に、文由閣三階において、「気仙沼震災復興報告会」を清涼院副住職 三浦賢道師とシャンティ国際ボランティア会(SVA)気仙沼事務所職員らの笠原一城さんに行っていたきました。わずかな時間でも覗いていただいた方も含めて、四〇名ほどの方にご参加いただきました。誠にありがとうございました。当日は、現在当地で進めている活動、「あつまれ、浜わらす!」のスタッフ手づくりの「はまわらすキャンドル」の販売も行い、合計三十五個もお買い求めいただきました。ご購入いただいた代金は、「あつまれ、浜わらす!」の活動資金として使用させていただきます。報告会の内容の一部をここに、ご報告いたします。今後とも、さらなるご協力およびご支援を賜ればと切に願っております。

「気仙沼震災復興報告会」

- ① 震災からの清涼院の様子
- ② 清涼院を拠点としたシャンティ国際ボランティア会(SVA)の活動内容
- ③ 子どもを中心とした場合の現在の気仙沼の課題

- ・「津波」により「海」に対する恐怖心をもった人が増えた
 - ・海中の瓦礫や復旧工事などで、海に近づけない状況
 - ・気仙沼市内では、海水浴場の再開は1カ所のみ
 - ・小中学校では「海の行事」を制限している
 - ・親も子どもを海に連れて行くことを躊躇している
 - ・海と人の関係は「防潮堤」「避難道路」等ハード対策のみ
- 結果「海」と関わる機会は減り、海の暮らしが消滅するのでは？**
- ④ 課題を解決するための、「あつまれ、浜わらす!」の活動内容
- ・子どもたちが海や自然と関わる機会をつくり、自然との関わり方を伝える
 - ・大人から子どもまで、さまざまな世代の交流を促進し、先人の生きる知恵を伝える
 - ・地域の文化、海辺の暮らしを伝える

文由閣 行持のご案内

朝坐禅(お粥と坐禅の会)をはじめました

毎月最終木曜日の朝は、いつもより少しだけ早起きをして、静かに自分と向き合う時間を。坐禅で身体・呼吸・こころを調えリラックス。その後は、所作を調え一杯のお粥を美味しくいただきます。いのちのつながりに感謝し、祈りを捧げれば、心地よい一日の始まりです。優しく丁寧な指導を行いますので、体に無理なく座っていただけます。どうぞ、お気軽にご参加ください。

開催日…毎月最終木曜日

※12月のみ12月24日(木)に開催。最終木曜日ではありませんのでご注意ください。

時間…6時30分～7時30分

(8時まで自由参加の茶話会)

場 所…東長寺檀信徒会館

「文由閣」(1階受付へお越しください)

定 員…15名(先着順)

参加費…一、〇〇〇円

持 物…足を組み、深く大きい呼吸をします。ユツタリとした柔らかい素材の服装をご用意ください(スカートは禁止)。更衣室もございます。

プログラム…

坐禅「6時30分」

行粥「7時10分」

祈りの時間「7時25分」

茶話会 ※自由参加「7時30分」



年末年始 山内行持およびイベントのご案内

フリーダイヤル
0120-3335-8550は
昨年末にて停止いたしました。
ご了承ください。

修正会ならびに新年会のお知らせ（詳細は別紙を参照ください）

平成28年度修正会法要ならびに新年会は、左記の日程にて開催いたします。新年のお祝いのひとときをお過ごしいただければ幸いです。当日は、新年の祝祷とともに、ご長寿を祈念して「賀寿」のお祝いをいたします。ささやかながら、お祝いの品をご用意させていただきました。寒中ではございますが、万障お繰り合わせの上、ご参加くださいますよう、山内一同お待ち申し上げます。

日程…平成28年1月17日〔日〕

受付…午後12時半より

会場…明治記念館（JR信濃町駅より徒歩5分）港区元赤坂2-2-23

会費…お一人につき一万円

定員…二〇〇名

お申し込み…お電話にてお申し込みください。〆切りは1月9日〔土〕までとさせていただきます。なお、賀寿に当たられる方は事前にお申し付けください。

「賀寿」古希(数え年70歳)昭和22年生まれ

喜寿(数え年77歳)昭和15年生まれ

傘寿(数え年80歳)昭和12年生まれ

米寿(数え年88歳)昭和4年生まれ

卒寿(数え年90歳)昭和2年生まれ

白寿(数え年99歳)大正7年生まれ

紀寿(数え年100歳)大正6年生まれ

お支払い方法…後日郵便振り替え用紙を送付いたします。通信欄に、ご出席者のご住所・お名前を記入の上、1月15日〔金〕までにお支払いください。なお、キャンセルに伴う返金は、1月10日〔日〕までを申し受け日とさせていただきます。

大般若祈祷会のご案内（詳細は別紙を参照ください）

平成28年2月11日〔木・祝〕

本年より檀家・縁の会・結の会すべての皆さままでの合同法要となりました。当日は、願い主のお名前と願い事を書いた御札をご祈祷いたします。

御祈祷料 一願につき 五千円(当日、受付にてお納めください)

左記ご参照の上、願文をお選びください。

願文例

心願成就(心にある願い事がかないますように)

家内安全(家族が安らかでありますように)

交通安全(交通事故にあいませぬように)

商売繁盛(商売がうまくいきますように)

火盗消除(火事や盗みにあいませぬように)

傷病治癒(病気や怪我が治りますように)

身体健全(健康でありますように)

学業成就(学業が成就しますように)

仏道精進(仏道に勤み皆が幸せになりますように)

参列のお申し込みならびに願文は、1月31日〔日〕までに、お電話もしくはFAX、ハガキにてお知らせください。

お申し込み・お問い合わせ(午前9時―午後5時)

東長寺(代表)…03-3334-1974

FAX…03-3334-2150

大掃除

12月21日〔月〕午後1時より

山内の大掃除を、皆さまとご一緒にやりたいと思います。年間行持案内にて19日とご案内しておりましたが、都合により、右記の日程とさせていただきます。ご都合のつく方は、ぜひご参加ください。

懺悔会・おもちつき

12月28日〔月〕午前9時半より

懺悔会では、1年間の行いを懺悔し、心身ともに清浄にして、来たる1年間のための災障消除を祈念いたします。佛の名を唱えながら何度も礼拝し、自身を見つめることが主眼の法要です。

引き続き、お餅つきをいたします。山内すべてのお堂のお供え餅をつくり、都会では少なくなつたお餅つき、杵を持つのは初めてという方も多いかと想いますが、ぜひ挑戦してみてください。皆さまにも、つきたてのお餅を召し上がっていただけます。

歳末年始法要・除夜の鐘

12月31日〔木〕

午後11時15分より 年末法要

午後11時45分より 除夜の鐘

引き続き、年始法要、萬灯供養を行います。大般若を転読し、新年の多幸を祈念いたします。ご自身のみならず、世界の人人々の平和を、ご一緒に祈りいたしましょう。

開山忌

平成28年2月22日〔月〕午前11時より

会場…開山堂

右記の日程にて、開山忌法要を執り行います。

東長寺を開かれた雪庭春積大和尚ならびに、開山堂にお祀りされている方々のご供養をいたします。

【イベントのご案内】

仏教文化講座

元旦を除く毎月1日は、羅漢堂にて左記の要領にて仏教文化講座を開設しています。

檀信徒のみならず、広く一般の方にもご参加いただけますので、お誘い合わせの上ご来山ください。なお、参加費は無料です。

毎月1日 開場…午後4時半／開講…午後5時

2月1日〔月〕「永代供養墓をもつ寺院の可能性」

くんにきてつゆう 國生徹雄（曹洞宗総合研究センター研修員）

3月1日〔月〕「日常にいかす禅の教え」

まかじましんじつ 君島真実（曹洞宗総合研究センター委託研究員）

教室のご案内(平成二十七年十二月―平成二十八年三月)

〔各種教室のご案内〕

坐禅会

毎週土曜日 ※年内と1月はお休みし翌年2月より
おとめします。

時間…午後6時―午後7時半
服装…坐禅をしやすい服装

写経会

毎月第2・第4木曜日

時間…午後2時―午後3時 ※文由閣の晩課
に参加いただけるよう30分開始を早くしました
持物…小筆があればご持参ください。
納経式…12月17日〔木〕午後1時より

お経の唱和と経典講読の会

毎月第3金曜日にお経のご指導をしております。
左記日程をご参照の上、お誘い合わせの上、ご
参加ください。

毎月第3金曜日

時間…午後11時半―午後1時
参加費…一、〇〇〇円
会場…東長寺本堂

折り紙教室

講師…湯浅信江先生「お茶の水おりがみ会館」

毎月第3木曜日

時間…午後2時より
受講料…三、〇〇〇円〔材料費・お茶代込み〕
会場…カフェ「きあん」

水彩画同好会

12月10日〔木〕

1月14日〔木〕・25日〔月〕

2月4日〔木〕・22日〔月〕

3月10日〔木〕・28日〔月〕

時間…午後2時より
参加費…一、〇〇〇円
会場…カフェ「きあん」

うたごえ茶房ゆりかご

2月8日〔月〕※1月はお休みします

3月7日〔月〕

時間…午後2時より
参加費…五〇〇円〔ドリンク付き〕
会場…カフェ「きあん」

碁縁の会「囲碁の会」

12月3日〔木〕・10日〔木〕

1月14日〔木〕・28日〔木〕

2月4日〔木〕・25日〔木〕

3月10日〔木〕・24日〔木〕

時間…午後1時より
会場…カフェ「きあん」
連絡先…

042-563-0634〔担当員〕
03-3647-4779〔担当 河村〕

長麺会「そば打ち同好会」

12月14日〔月〕

1月25日〔月〕

2月22日〔月〕

3月28日〔月〕

時間…午前10時より
参加費…一、五〇〇円
会場…東長寺一階食堂
連絡先…

042-557-4632〔担当 横山〕
042-942-3930〔担当 舟木〕

フリーダイヤル
0120-335-8550は
昨年末にて停止いたしました。
ご了承ください。

観世流謡曲教室のご案内

講師…中島志津夫先生「観世流能楽師」

12月3日〔木〕・10日〔木〕

1月21日〔木〕・28日〔木〕

2月18日〔木〕・25日〔木〕

3月10日〔木〕・24日〔木〕

時間…午後1時半より

受講料…六、〇〇〇円〔月毎〕

会場…書院二の間

仏教讃歌を歌う会

指導…高部さち先生

〔藤原歌劇団準団員ボイストレーナー〕

毎月第3金曜日

時間…午後2時―午後4時

参加費…一、〇〇〇円

会場…カフェ「きあん」

コーラス同好会・法律相談会

都合により、当分の間お休みさせていただきます。

秋彼岸会チャリティーバザー

秋彼岸会チャリティーバザーの売上は、28万6890円となりました。お買い上げたいただいた方はもちろんのこと、ボランティアスタッフの方々や手作りの作品をご提供くださった方、寄付をくださった方等々、多くの皆さまのご協力に心より感謝申し上げます。

東長寺募金活動

お預かりしている募金の中から50万円を、NPO法人「はまわらす」に寄付させていただきました。 「はまわらす」は被災地の子どもたちが「ふるさと」に誇りをもち「未来」を創っていきけるよう、自然体験活動を通じて子どもたちの「生きる力」を引き出していくと活動しています（「はまわらす」の詳細は27ページをご覧ください）。

『萬亀』特別号終了のご挨拶とアンケートご協力をお願い

このたびは、『萬亀特別号』をお読みいただきまして、ありがとうございました。

昨年度より発行してまいりました『萬亀特別号』は、本号をもって終了とさせていただきます。

文由閣建立を記念し、「特別号」という形で、東長寺の未来への想いを皆さまにお届けしてまいりましたが、

来年度からは、寺報『萬亀』として、東長寺、そして文由閣プロジェクトについて、ご報告してまいります。

特別号終了にあたり、『萬亀』の充実した誌面づくりのために、アンケートを同封させていただきました。

今後の参考として、ぜひご意見をいただけますよう、ご協力の程、宜しくお願いいたします。

アンケートはご記入後、同封の返信用封筒にて、ご返送ください。

東長寺ホームページにて、『萬亀特別号』のバックナンバーをご覧ください。

平成28年東長寺年分行持

1月	1日[金]	年始法要・三朝祈祷
	17日[日]	修正会・新年会
	26日[火]	高祖降誕会
2月	11日[木・祝]	大般若祈祷
	15日[月]	釈尊涅槃会
	22日[月]	開山忌
3月	17日[木]～23日[水]	春彼岸会
	20日[日・祝]	彼岸会法要
4月	3日[日]	花まつり法要
5月	26日[木]	山門大施食会・護持会総会
6月	14日[火]	観音供養祭
7月	13日[水]	盂蘭盆会法要
9月	19日[月・祝]～25日[日]	秋彼岸会
	22日[木・祝]	彼岸会法要
11月	21日[月]	太祖降誕会
	23日[水・祝]	千手・地藏・羅漢供養
12月	8日[木]	釈尊成道会
	20日[火]	大掃除
	28日[水]	懺悔会・もちつき
	31日[土]	歳末法要・除夜の鐘



曹洞宗 萬亀山 東長寺

160-0004 東京都新宿区四谷4-34

(代表) 03-3341-9746

(縁の会) 03-3353-6874

(文由閣・結の会) 03-5315-4015

<http://www.tochoji.jp>